

毛澤東選集

第四卷



三一書房

一九五七年十二月二十日 発行

毛澤東選集 第四卷

定価 七五〇円

編者 毛澤東選集刊行会

発行者 田 畑 弘

印刷所 京都市下京区西洞院七条下ル
内外印刷株式会社

製本所 京都市下京区油小路正面
株式会社 古川製本所

発行所 株式会社 三一書房

京都市左京区北白川西平井町二四
電話吉田⑦三〇〇一
振替東京六四〇一三番
東京代田区神保町一ノ四番
電話東京八四一八五〇番
振替東京八四一八五〇番

落丁・乱丁本はおとりかえいたしません

検印
廃止

三一書房

凡 例

一、これまでの本選集日本語訳には、「三一書房刊行青表紙六冊本」と「三一新書版」七冊本（いずれも原本第三冊まで）があり、青表紙B6版六冊本のはじめの二冊には、中国原本になかったものを、日本の読者の参考にと考え、附録としてのせておいた。しかし、その後、中共毛澤東選集出版委員会の意見にしたがい、その方針をあらためて、原本どおりにした。「三一新書版」および本版は原本第二版によっており、原本第二版は第一版にくらべて、各篇の排列が多少ことになっており、また、著者によって多少訂正されている部分がある。なお、毛澤東選集出版委員会の註釈にも多少の訂正や削除があり、新しい註も一、二加えられている。新書版および本版はこれらの点をすべて原本第二版によって訂正してある。原本第四巻がちかく出版されるので、本版にはこれを加える。

一、はじめの旧訳本には誤植、誤訳、不適訳のところがかなりあり、不十分なものであった。新書版では根本的な改訳をおこなったが、なお、誤植がかなりにあった。本版はこの点を改めるとともに、部分的に訳の調子をあらためた。

一、改訳にあたっては、中国外文出版社版英語分冊本、ロシア語訳本、ロンドン英訳本を参照した。部分的にはドイツ語訳本をも参照した。これら語本で多少解釈を異にしているところについては、いずれにもかたよらず、併せ参照しながら、われわれ独自の理解で訳出した。

一、段落を原本どおりにすると、改行がすくなく、読みづらいので、改行を多くするために、段落のきりかたはロシア語

訳本にしたがった。この点では、英訳本も原本どおりにせず、改行を多くしている。

一、註のつけかたについては、毛澤東選集出版委員会の原註は「(一)」、「(二)……」で各篇の論文の終りに原本どおりにいれ、訳註は「〔1〕」、「〔2〕……」で各段落の終りにいれた。なお、理解を容易にするため、訳者が補ったことばは、そのことばのつぎに「(……)」でいれた。文中にある「(……)」括弧内のことばは原著者の補足である。

一、読者ならびに各方面の權威者の方々の御援助により、旧訳にあった不備や誤訳は著しく改められたものと信じているが、なお、今後とも、この偉大な理論と経験の豊庫を正しく日本国民につたえ、日本国民のものにするために、不備な点をあらためるよう努力してゆきたい。ここに援助と叱正を切望するしだいである。

一九五七年九月

日本毛澤東選集刊行会

目次

抗日戦争の時期（つづき）

延安文芸座談会における講話 九

話のいとぐち 九

結 論 一六

極めて重要な政策 四九

第二次世界大戦の転換点 五五

十月革命の二十五周年を祝す 五三

抗日時期の経済問題と財政問題 五五

指導方法の若干の問題について 七三

国民党に問う 八一

根拠地での小作料引下げ運動、生産運動および擁政愛民運動を展開せよ 九二

国民党第十一回中央執行委員会全体会議と第三期国民参政会第二回會議を評す 九七

組織せよ	一五
学習と時局	一七
附録 若干の歴史的な問題にかんする決議	一五
人民に奉仕せよ	二〇
双十節における蔣介石の演説を評す	二〇
文化活動における統一戦線	二五
経済活動を学ばなければならぬ	二九
遊撃区でも生産をおこなうことができる	三九
中国の二つの運命	三五
連合政府について	三九
一、中国人民の基本的要求	三九
二、国際情勢と国内情勢	四一
三、抗日戦争の二つの方針	四四
中国問題の鍵	四四
曲りくねった道をたどる歴史	四五
人民戦争	四九
二つの戦場	五〇

中国解放区	二五八
国民党支配地区	二五七
「二つのコースの」比較	二六〇
「抗戦を破壊し、国家を危くする」ものは誰か	二六三
「政令、軍令にしたがわない」といわれること	二六三
内戦の危機	二六四
交渉	二六五
二つの前途	二六五
四、中国共産党の政策	二六七
われわれの一般綱領	二六九
われわれの具体的綱領	二七〇
中国国民党支配地区での任務	二七〇
中国の被占領地区での任務	二七〇
中国解放区での任務	二七〇
五、全党は団結して党の任務の実現のためにたたかえ	二七三
愚公、山を移す	二七三
生産による軍隊の自給および整風・生産の二大運動の重要性について	二七九
ハーレーと蔣介石の猿芝居はすでに破産した	二八三
ハーレーの政策の危険について	二八四

フォスター同志への電報……………三四五

日本侵略者にたいする最後の一戦……………三四七

抗日戦争の時期
(つづき)

延安文芸座談会における講話

(一九四二年五月)

話のいとぐち (一九四二年五月二日)

同志諸君！ 今日諸君にあつまっていたいて、座談会をひらいた目的は、みなさんと意見を交換し、文芸活動と革命の一般的な活動との関係を研究し、革命的な文芸の正しい発展をはかり、革命的な文芸が革命のその他の活動により一そう助けとなるようにすることによって、わが民族の敵をたおし、民族解放の任務を完成しようとするにある。

中国の人民を解放するためのわれわれの闘争にはいろいろの戦線があり、文武の二つの戦線、すなわち、文化戦線も軍事戦線もそのうちにふくまれる。われわれが敵にうちかつには、まず銃を手にした軍隊に依存しなければならぬ。しかし、たんにこの軍隊があるだけでは十分でない。われわれには、さらに、文化の軍隊がなければならぬ。これは、われわれ自身を結集し、敵に勝利するのに、どうしてもなくてはならない軍隊である。中国では、この文化の軍隊は、「五・四」のときから形成されており、それは、中国革命をたすけて、中国の封建文

化と帝國主義の侵略に適應する買弁文化の地盤をしだいにちぢめてきたし、また、しだいにその力をよわめてきた。いまだでは、中国の反動派は、「量によって質に対抗する」という方法をもちだして新しい文化に対抗するほかなくなっている。つまり、反動派にはよいものは出せないの、金に物をいわせて、一生懸命に量を多く出すのである。

「五・四」以来の文化戦線では、文学と芸術は成果のあがつた重要部門である。革命的な文学・芸術運動は一〇九年の内戦の時期に大きな發展をとげた。この運動と当時の革命戦争とは、一般的な方向の点では一致していたが、實際活動の面では、たがいにむすびついていなかった。これは、当時の反動派によってこの兄弟のような二つの軍隊のあいだがきりはなされていたからである。抗日戦争勃発後、延安やその他の各抗日根拠地にやってくる革命的な文芸活動家が多くなった。これは非常によいことである。しかし、根拠地にきたということは、けつして、すでに根拠地の人民大衆と完全にむすびついたということを意味しない。革命の仕事を進進させるには、われわれはこの両者を完全にむすびつけなければならない。われわれの今日の会合は、文学・芸術を、革命という機械全体の一構成部分としてそれにまったくふさわしいものにし、また、人民を結集し、人民を教育し、敵を攻撃し、敵をほろぼすための有力な武器にし、また、人民が一心同体となって敵とたたかうのをたすけるようにしようとするのである。この目的のためにはどんな問題を解決しなければならないだろうか？ 私はずぎのような問題があると考える。すなわち、文芸活動家の立場の問題、態度の問題、活動対象の問題、およびどう活動し学習するかの問題である。

立場の問題。われわれはプロレタリアートと人民大衆の立場に立っている。共産黨員としては、やはり、党の立場に立たなければならないし、党性および党の政策をまもらなければならない。この問題で、わが文芸活動家

のあいだに、なお認識が正しくないか、認識の不明確なものがないだろうか？ 私はあると思う。多くの同志たちはしばしば自分の正しい立場を見失っている。

態度の問題。立場いかによって、さまざまな具体的な事物にたいしてとる具体的な態度がうまれてくる。たとえば、称讃するか、それとも、ばくろするか、これが態度の問題である。結局、どちらの態度がわれわれには必要なか？ 二つとも必要だと私はいいたい。問題は、どういう人々にたいしてであるかということである。それには三つある。その一つは敵であり、他の一つは統一戦線内の同盟者であり、もう一つはわれわれの陣営内のものであり、この第三の人々が、人民大衆とその前衛隊である。この三つの種類の人々にたいして三つの異った態度をとる必要がある。敵にたいして、すなわち、日本帝国主義とすべての人民の敵にたいしては、革命的な文芸活動家の任務は、彼らの暴虐と欺瞞をばくろするとともに、彼らがかならず失敗の方向にすすむことを指摘し、抗日軍隊と抗日人民が一心同体となり、断固として彼らを打倒するよう、はげますことである。統一戦線内のさまざまな同盟者にたいするわれわれの態度としては、提携もし批判もしなければならないが、提携するにも批判するにも、さまざまなちがいがなければならない。われわれは彼らの抗戦には賛成である。もし成果があがれば、われわれは、これを称賛もする。しかし、かれらが抗戦に積極的でなければ、彼らを批判すべきである。共產党に反対し、人民に反対して、日一日と反動化の道をすすむものがあれば、われわれはこれと断固として闘わなければならない。人民大衆については、人民の勤労と闘争については、人民の軍隊・人民の政党については、われわれはもちろんこれを称賛しなければならない。人民にも欠点はある。プロレタリアートのあいだでも、多くの人がブルジョア的な考えをなおのこしており、農民や都市小ブルジョアはいずれもおくれた考えをもっている。これらは闘争するさいのかれらの重荷になる。われわれは、長いあいだ辛抱よく、彼らを教育し、

その背負っている風呂敷包みをなげすて、その欠陥や誤りと闘うのをたすけ、彼らが大またに前進できるようにしてやらなければならない。彼らは、闘争のなかで、すでに自己を改造したか、もしくは改造しつつある。われわれの文芸は彼らのこの改造過程をえがくべきである。彼らが誤りを固執さえしなければ、われわれは、一面的な見方によって、あやまって、彼らを嘲笑したり、敵視したりするようなことをすべきではない。われわれが書くものは、彼らを團結させ、彼らを進歩させ、彼らが一心同体となって、前進に努力し、おくれたものをすて革命的なものをのばすようにさせなければならない、けっしてその反対であってはならない。

活動対象の問題、すなわち、文芸作品をだれにみせるかの問題。この問題は、陝西・甘肅・寧夏辺区や華北、華中の各抗日根拠地では、国民党支配地区におけるばあいとは異なるし、抗戦以前の上海におけるばあいとはなおさら異なる。当時の上海では、革命的な文芸作品をうけとるのは、主として、一部学生・職員・店員であった。抗戦以後の国民党支配地区では、その範囲はある程度ひろがったが、基本的にはやはりこれらの人々が主である。なぜなら、そこでは、政府が労働者・農民・兵士を革命的な文芸から切りはなしているからである。われわれの根拠地では、まったくこれと異なっている。根拠地では文芸作品をうけとるのは労働者・農民・兵士および革命の幹部たちである。根拠地には学生もいるが、これらの学生は、旧式の学生とは異なっている。彼らは以前幹部であったものか、でなければ、将来幹部になるものである。各種の幹部、部隊の戦士、工場の労働者、農村の農民たちは、文字を知っておれば、本や新聞を読みたがるし、文字を知らなくても、芝居を見たがり、絵を見たがり、歌をうたいたがり、音楽をききたがる。われわれの文芸作品をうけとるのは彼らである。幹部だけについていっても、この部分に属する人々の数がすくないなどと考えてはならない。それは、国民党支配地区で何か一冊の本が出版されたばあいの読者よりもずっと多い。そこでは、一冊の本の一版はふつう二千部にすぎ

ず、三版でたとしても六千部にすぎない。だが、根拠地の幹部で本が読めるものは延安だけでも、一万人以上いる。そのうえ、これらの幹部の多くはみな長いあいだきたえられた革命家であり、彼らは全国各地からやってきており、また各地にいて活動するものである。したがって、これらの人々にたいする教育活動は重大な意義をもっている。わが文芸活動家たちは彼らのために立派な仕事をしなければならぬ。

文芸活動の対象が労働者・農民・兵士およびその幹部なのだから、彼らのことを理解し、彼らのことを知るという問題が生れてくる。彼らのことを理解し、彼らのことをよく知るためには、また、党および政府機関で、農村で、工場で、八路军と新四軍のなかで、さまざまな人々のことを理解し、さまざまな人々のことをよく知り、さまざまな事がらを理解し、さまざまな事がらをよく知るためには、非常に多くの仕事をする必要がある。わが文芸活動家たちには自己の文芸活動をおこなう必要があるが、人々を理解し、人々をよく知る仕事を第一におこななければならない。わが文芸活動家たちは、これらの点で、これまでどのような状態にあっただろうか？　これまで、彼らはよく知っておらず、理解しておらないで、腕をふるう余地がないと英雄きどりでいた。よく知っていないとはどういうことか？　人々をよく知らないということである。文芸活動家たちが、自己のえがく対象および作品をうけとるもののことをよく知らないか、全然それにちがひがないことである。わが文芸活動家たちは労働者のことをよく知らず、農民のことをよく知らず、兵士のことともよく知らず、幹部のことさえよく知らない。理解しないということはどういうことか？　言葉を理解しないということである。すなわち、人民大衆の豊かないきいきとした言葉についての十分な知識に欠けていることである。多くの大芸活動家たちは、大衆から離れていて生活がからっぽだから、人民の言葉をよく知らないのも当然である。したがって、彼らの作品は、ひどく言葉が無味乾燥なばかりでなく、そこには、つねに、ムリにこしらえた、人民の言葉とは対立する、無細工な

語句がはさまっている。多くの同志たちは「大衆化」という言葉をよく口にしてはいるが、大衆化とはなにか？それは、われわれの文芸活動家の思想感情と労働者・農民・兵士大衆の思想感情とを一つのものにすることである。一つのものにするためには、大衆の言葉をまじめにまなばなければならない。大衆の言葉にさえわからないのがたくさんあるのに、どうして、文芸創作など語れようか。腕がふるえないと英雄気どりでいるといったのは、つまり、諸君がいくらもってもらしうえらそうなことをいっても、大衆がいつこう感心しないということである。大衆の面前で、諸君の資格をてらえはてらうほど、英雄気どりをすればするほど、それを売りものにしようとするほど、大衆はますます諸君を買わなくなるであろう。諸君が、大衆から理解してもらい、大衆と一つになろうとするには、諸君は長いあいだの、苦痛にさえ感じられるほどの試練を経なければならぬ。

ここで、私は、私の感情の変化についての経験を話してみよう。私は学生出身であり、学校では一種の学生かたぎが身につく、荷物をかつぐことも荷物を手でさげることでもない大勢の学生のまえで、自分の荷物をかつぐ労働すらぶざまだと感じるようになっていた。そのころ、私は、世の中で清潔な人間は知識人だけで、これにくらべると、労働者・農民は、なんといっても、きたない、と思っていた。私は、知識人の着物なら汚れていいまいと考え、他人のものでも着る気になったが、労働者・農民の着物ならよごれていると考えて、着る気になれなかった。革命的になり、労働者や農民や革命軍の戦士たちといっしょにいるようになってから、私はしだいに彼らをよく知るようになったし、彼らもまたしだいに私をよく知るようになった。そのとき、そのときになってはじめて、私はブルジョア学校がおしえてくれた、あのブルジョア的な、小ブルジョア的な感情を根本からあらためた。まだ改造されていない知識人と労働者・農民とを比較してみると、知識人がきれいではないこと、もっともよごれないのはやはり労働者・農民であり、たとえば、彼らの手がまっくろで、脚に牛のくそがついてい